

出会い、そして結婚、 5人の子どもたち……

二人は東京の会社の同僚として出会い、大阪に転勤後、平成6年に結婚。翌年には阪神淡路大震災を経験。もともと素朴で自然な生活が好きな二人、平成14年、都会ではなく地方で子育てをしたいと考え、国彦さんは勤めていた会社に願い出て転勤し、平成14年に知美さんの実家のある福島市に帰郷しました。ところがその2年後、突然、国彦さんが勤めていた会社が倒産。育ち盛りの子供3人を抱え二人は大きな危機に直面します。でもそのとき、知美さんに、生活



家族旅行で



雰囲気伝わる工夫を凝らした看板

費の事は心配しないでお父さんが本当にやりたい仕事を見つけてと言われまし。本当にしたい仕事。国彦さんの中にはある情景が浮かびました。もともと小さいころから虚弱体質だった国彦さんでしたが、指圧の先生に治療をしてもらったり両親に手当てしてもらって、丈夫になれた経験がありました。「次は自分が、誰かを癒し治せるような治療の仕事をしたい。すでに35歳を過ぎていました。資格も資金もない中、ある整体の先生に弟子入りさせてもらい片道30キロの距離を2年間、毎日修業に通いました。どん底の中に人生の可能性を探る日々でした。」



整体院での施術

**開業—ロコミで広げた
お客さんの輪**
平成16年、8か月の失業保険が終わった時に、修業を続けながら開業しました。場所は、妻知美さんの祖母が駄菓子屋をしていた自宅の一角。資金が足りないため、全てDIY。12畳の部屋に床板を張り、トイレも自分で工事し、ベッドを設置してようやく完成。整体院・縁の開業です。「縁」とは、最初の子どもが女の子だったから「縁」と書いて「ゆかり」と名付けようと思った。最初の子どもが男の子で、そのあとしばらく考えていた名前を忘れていたものの、今回開



整体院の前で

業に当たり、フツと名前が浮かんできました。すべてが手作りで誕生した整体院です。子どもにつけようかとて温めていた名称が出てきたのも自然な流れでした。開業してから最初の1年間は厳しい時期が続きました。貯金を取り崩す毎日。その間4人目、5人目が誕生。最後の5人目の娘は自宅出産で、4人の子もたちがへその緒にはさみを入れて取り上げ、みんなで新しい家族を迎えた大きな体験になりました。この体験が大きなきっかけとなり、長女は福島県立医大の看護学部に入學。出産にたずさわる仕事をしたいと、現在、看護師・助産師を目指して勉学に励んでいます。

仕事の合間に「ほっ」と一息。働く人の癒やしマガジン【癒え〜る】

発行：採用と教育研究所 Saiyou to Kyouiku Kenkyujyo 発行日：2018年6月



整体院 縁

福島県福島市野田町1-7-28
電話：024-534-0635
営業時間：午前8時～午後7時（定休日：日曜日）

YELL

Vol. 17

創業期

JR福島駅の西口から徒歩10分。福島市野田町1丁目の閑静な住宅街の中に、開業して15年目になる「整体院 縁（えん）」があります。茶色とクリーム色の落ち着いた色彩の整体院の建物は、内壁に杉板と漆喰（しっくい）という自然素材を用い、地下には1トンの備長炭を基礎の下に埋めて磁場を高め、マイナスイオンで満たされた、体と心がホッとする空間になっています。玄関はたくさんの絵手紙を飾ったミニギャラリーになっており、にこやかな笑顔いっぱい松井夫妻が迎えてくれます。訪れた人は皆、ほっこりと表情がほころぶ。そんな雰囲気であたたか空間です。その空気の中には、知美さんの故郷、福島市に整体院・縁を開業し、事業が軌道に乗るまで、二人三脚で歩んできた道のりがありました。



マイナスイオン漂う整体院

心の支えになった絵手紙

そんな中、国彦さんの心の支えになり、またお客さんの輪を広げることもつなごうと、お父さんの長年続けてきた絵手紙で、国彦さんはまだサラーマンだった。25年前の26歳の時、「はがき道」を提唱している坂田通信さんの講演を聞く機会がありました。「はがきで人生が変わる。思いが叶う。奇跡が起きる。」

一日3通のはがきを書く事なら、3日坊主の自分にも出来るかもしれないと思い、その日に友達の方にはがきを送り始めました。はがきのおかげで、サラーマン時代も、出逢った方々のつながりが深くなってゆくことを実感しました。いつしか、はがきを書くことが習慣になって行きました。開業前後、開古鳥が鳴くような整体院の中で、来てくださったお客さんにお礼の気持ちを伝える為に新しい取り組みを始めました。はがきに挿絵を入れる事と、お会いした翌朝に配達可能な範囲ではがきをお届けする事、描いた絵ハガキを掲載した月刊ニュースを作る事でした。徒歩や自転車を書いて時には車で、自分自身の手で、一人ひとりのお客さんのポストに投函していくのです。

絵手紙は、お客さんが訪れたその日のうちに感謝の気持ちを込めて描きます。



未緒えりさんと一緒に絵手紙を書く松井さん

伝承伝達、娘とのコラボ、フェイスブックで発信

その後、松井一家は福島市内で暮らすことを選択、老朽化した自宅を壊し、現在の新しい自宅兼整体院を建てました。治療の合間に絵手紙を描き続ける習慣は変わりません。絵手紙と、開院以来、手作りで行っている「月刊わくわくニュース」の配達も継続中です。少し変わったのは、未っ子の娘えりさんが、国彦

彦さんと一緒に絵手紙を描くようになって決める。朝の5時には起きて自宅を出ます。「生活リズムが整い、健康維持にも役立つんです」と国彦さん。絵手紙の配達で、お客さんとのつながりも深くなり、リピーターが増えた。月刊ニュースは月初めに配達(約250件)と郵送(約150通)をします。お客さんが別のお客さんと呼んでくれる「口コミ」も拡大し、事業は順調に拡大していきま。毎年、12月24日前後には、地域の皆さんやお客さんから、「お子さんたちのために」とたくさんからの思いがけないプレゼントに子どもたちも大喜び。松井夫妻も毎年、感激に包まれる時期です。大ピンチから頑張り続けて迎えた穏やかな日々。そんな時に、大きな出来事が起きます。東日本大震災です。



震災後、最初に描いた赤べこの絵手紙



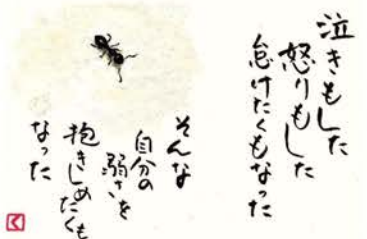
彦さんと一緒に絵手紙を描くようになって決める。朝の5時には起きて自宅を出ます。「生活リズムが整い、健康維持にも役立つんです」と国彦さん。絵手紙の配達で、お客さんとのつながりも深くなり、リピーターが増えた。月刊ニュースは月初めに配達(約250件)と郵送(約150通)をします。お客さんが別のお客さんと呼んでくれる「口コミ」も拡大し、事業は順調に拡大していきま。毎年、12月24日前後には、地域の皆さんやお客さんから、「お子さんたちのために」とたくさんからの思いがけないプレゼントに子どもたちも大喜び。松井夫妻も毎年、感激に包まれる時期です。大ピンチから頑張り続けて迎えた穏やかな日々。そんな時に、大きな出来事が起きます。東日本大震災です。

3・11の震災

東日本大震災震災直後から福島市では物流が止まり、地域によって停電、断水が起きました。国彦さんは混乱とショックで絵手紙を書くことができませんでした。ペンを持つことすら忘れてしまいう日々。

数日後、ふと国彦さんは一枚の絵手紙に目が留まりました。震災の2日前に描いたものでした。そこに書いていたメッセージに衝撃を受けます。福島県の郷土民芸品で豊かさや幸福の象徴とされる赤い牛、「赤べこ」の頭に、「もうだいたいぶだよ、しんはいないよ、きつとうまくゆくよ。赤べこが土下に首を挿らして助ますようにうなずいています。『ああ、自分はだいたいぶだよって書いていたんじゃないか!』絵手紙に残された言葉と赤べこがくれた勇氣。国彦さんは自分自身を取り戻しました。「よし、もう一回書いてみよう。」

すると、震災前とは違う絵手紙が次々に生まれました。鎮魂の思いを込めたお地藏さん。小さいけれど日々をコツコツ生きたアリの絵には「泣きもした 怒りもした 泣けたもなくなった そんな自分の弱さを抱きしめたくなった」という言葉。気づいたら、言葉がたくさ



コツコツ生きるアリと自分を重ねて描いた絵手紙

彦さんの絵手紙は1800枚になりました。目標は5千枚。月刊ニュースの目標500号。30年後の81歳で達成の予定で、目標に向かってまい進しています。えりさんも1000枚を目指して親子一緒に続けています。

国彦さんは言います。「絵手紙を続けて良かったことは3つ。一つは、書く時は自分や他人を肯定できる言葉や励ます言葉、ホッとしたり、クスッと笑顔になる言葉しか心に浮かべない。その作業の積み重ねの中に、自分が生きている意味を確認できることです。二つ目は、絵手紙を見てくれた人が喜んで心も元気になったと言ってもらえること。三つ目は募金を通じて社会のお役に立てること。このことを励みに、これからも続けていきます。」



えりさんの作品はユーモアたっぷり

採用と教育研究所

saiyo to kyouiku kenkyujo

プロフィール



代表：半田 真仁

上場企業や自治体等の「新卒採用から教育まで」一貫した支援サービスを行っている。これまで数多くの社員、職員採用・人材育成・職場定着等に携わり、CSR(社会貢献活動)を活用した「いい会社割り」のサポーターとして定評がある。

YELL Vol.17

発行：採用と教育研究所
〒960-8055
福島県福島市野田町6-7-8 電話 024-529-5153
info@saiyoutokyoku.com

